

Newsletter

February 2015

<http://www.aack.or.jp>

目次

キナール山群・スピテイ山群の隠れたる未踏峰 (インド・ヒマラヤ)

阪本公一1

マーディ・ヒマール・トレッキング

安仁屋政武.....10

図書紹介

The Bushmen: A Half Century Chronicle of Transformations in Hunter-Gatherer Life and Ecology. By Jirō Tanaka

安仁屋政武.....16

宇野 佐著「国立公園に魅せられて
—自然公園行政に関わった三十年の追憶—」

横山宏太郎.....17

第31回雲南懇話会(2014年12月20日開催)、その講演概要

前田栄三21

日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の案内<2015(平成27)年度>

AACK事務局..23

会員動向24

事務局から24

編集後記24

キナール山群・スピテイ山群の隠れたる未踏峰 (インド・ヒマラヤ)

阪本公一

今年2014年6月13日～7月4日の間、インド・ヒマラヤ北西部のキナール山群からスピテイ山群へ、知られざる隠れたる未踏峰の探査に出かけた。

今回のメンバーは、AACKの谷口朗(76歳)、福本昌弘(75歳)、村上正康(78歳)、私阪本公一(74歳)と、静岡の愛峰山の会の小林悦子(71歳)の合計5名の、老齢遠征隊だった。

スピテイ山群はラダック山群のすぐ南隣にあり、キナール山群はそのスピテイ山群の真南に位置する。

キナールとスピテイの西側には、6000m峰をたくさん連ねたラホール山群が位置するが、ラホール山群は、シムラヤマナリからの車道によるアプローチが便利で、又パキスタン及び中国との国境問題がそれほど深刻でないので、多くの登山遠征隊がこれまで訪れていて、殆どの6000m峰が登り尽くされている。

一方、キナールやスピテイは、アプローチが不便な事に加え、中国国境が近いので、インド

政府による登山規制が厳しく、登山許可がおりないためか、登山記録は極めて少なく、未だに隠れた知られざる未踏峰が数多く残されている。

キナール山群の山に挑戦した日本隊は、1986年の寺沢玲子隊長率いる日印女史合同Jorkanden(6473m)隊と、1997年の今井正史隊長率いるPhawararang(6349m)隊のたった2隊のみ。スピテイ山群には、日本としては7隊が登山記録を残している。

IMFに問いあわせたり、手に入る情報をもとに私なりにまとめたが、キナール山群・スピテイ山群には、まだまだ100座近くの未踏峰が残されていることが解ってきて、今回の探査行を企画することとなった。

キナールは、ヒンズー教文化圏の地域で、リンゴやジャガイモの産地として有名な緑濃い土地である。一方、スピテイは、ラダックと同様チベット仏教文化圏に入り、非常に乾燥した樹木の少ない岩と砂の土地である。

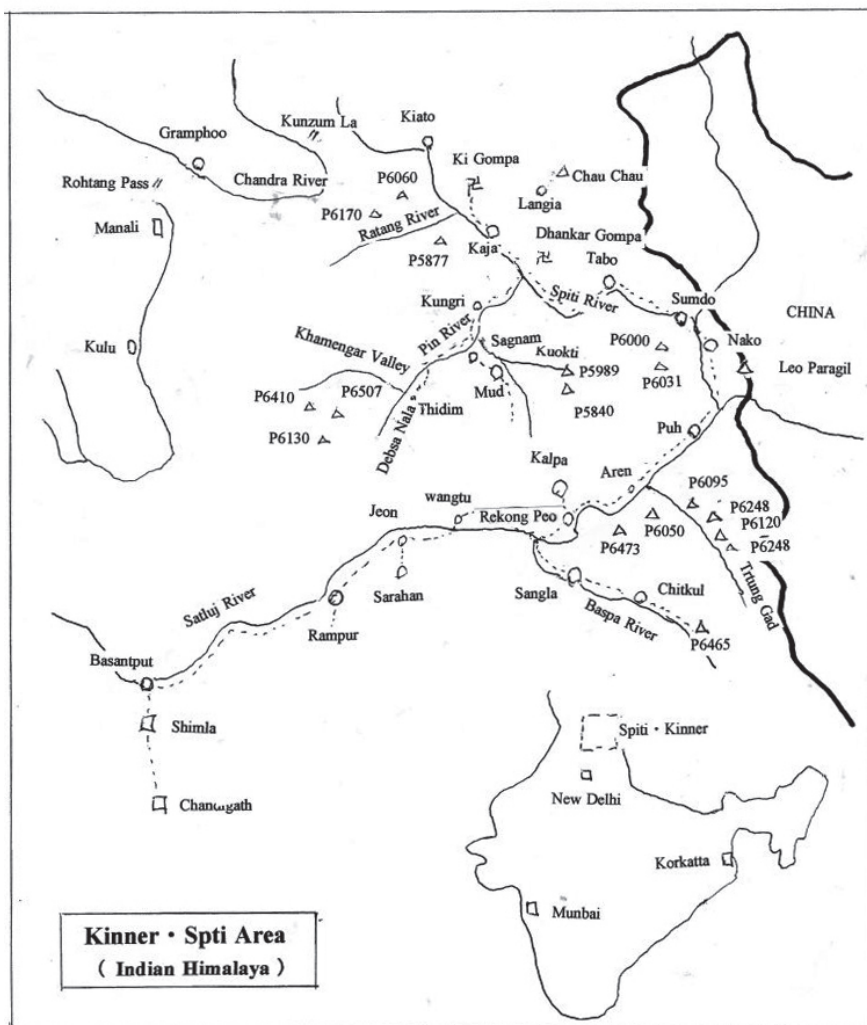


図1 Outline Map of Kinner · Spiti Area

6月13日(金) :

関東組の谷口、福本、村上、小林の4名は、成田空港よりタイ航空のTG643に乗り、阪本は関西空港よりTG623に乗って、バンコク空港で5名が合流してTG315に乗り継いで、午後9時にデリーに到着した。

6月14日(土) :

午前9時45分に、チャーター車2台で、デリーのホテル・フローレンスを出発して午後4時頃にChandigarhの町に到着。この町は、最近開発されたデリーにつぐ、大きな近代的な都会といわれているらしい。

6月15日(日) :

Shimlaに向かう前に、ChandigarhのRock

Gardenを見学。石で造った各種動物や人間の
人形が、広大な土地の中に展示されている大変
ユニークな公園であった。Shimlaまでの街道
沿いには、スイカやメロンを売っている屋台
が数多く立ち並んでいて、1個150~200円
のスイカを、これからの旅のためにガイドの
ツワン君が購入。午後3時に、ShimlaのHotel
Baljeers Regencyに投宿。ホテルの外観は良さ
そうだが、受付の従業員は極めて横柄な態度
で、サービス精神が全くなし。このホテルに着
くなり、不愉快な気分になった。夕食までに、
Shimlaの町を散策。丘の上のメイン・モールは、
ちょうどインドが夏休みに入った週末の日曜日
と言う事もあり、家族連れの旅人でごったがえ
していた。

6月16日(月):

英領時代は夏の首都となっていた丘の上の町 Shimla から、サトレジ河の Rampur まで、標高 1,000 m 以上のつづら折りの急坂を下る。カーブが余りにも多いので、村上さんと私は車酔い。サトレジ河には、あちこちに水力発電所が目立った。Jyori という町より標高 550 m 程上がった Sarahan に午後 2 時 10 分到着。Hotel Srikhand の近くの、ヒンズー教の寺院「ビーマ・カー」に参拝。インドには珍しい木造建築の寺院であった。

6月17日(火):

Wangtu より車道は右岸に渡るが、Wangtu から Baspa River との合流点までの道が崖崩れのため通行止めとなっていて、標高差 600 ~ 700 m 程の高巻き道を迂回させられ、1 時間以上余分に時間がかかった。合流点から Sangla までは、ゴルジュ帯の眼もくらむような断崖絶壁の怖い細い車道で、カーブを曲がるごとに肝を冷やした。正午前に Sangla に到着。昼食後、Chitkul の手前の Mostrang あたりまで、車で偵察に行くことにした。

Baspa River の右岸には、6000 m 前後の山々が連なっており、すべて未踏峰だと IMF から確認メールを貰っていた。Sangla から少し車で走ると Saro Garang と Leomann Maps に記載された支谷が北にはいつている。橋のたもとの看板には、Bridge Khagola Nala と書かれてあった。この谷の奥には、P5983, P5990, P6240, P6170, P6080 (Daboling) がある筈だが、谷川岳の一の倉沢のような大障壁が手前にかぶさり、その奥は雲で隠れて、6000 m 近い山頂はまったく望めなかった。右岸のその次の谷である Gor Garang も、手前の障壁で、奥の山がまったく望めず。この谷の奥には、P6080 (Daboling) と P6080 (Siro) がある筈だが、何も見えなかった。Rakcham 村を越えて 3 つ目の支谷 Nanga Nala の手前には、ITBP (India Tibet Border Police = インド・チベット国境警察) のチェック・ポストがあった。Baspa River の奥は、中国との国境地帯になっているので、外国人に対するパスポートのチェックも厳しい。このあたりから、Chitkul 村対岸にある Baspa River の左岸の支谷 Naradu Garang の奥に聳える、双耳峰の岩峰 P5712 が望まれ

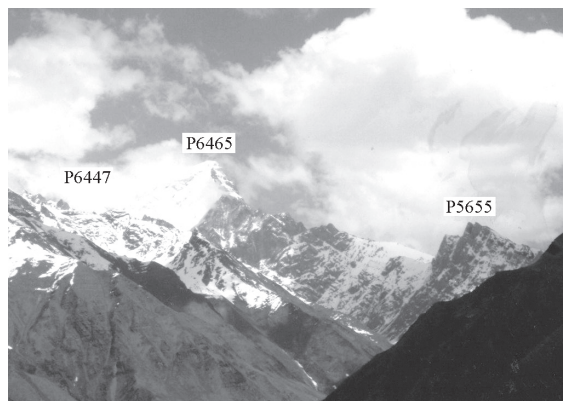


写真 1 Baspa River 奥の秀峰の未踏峰

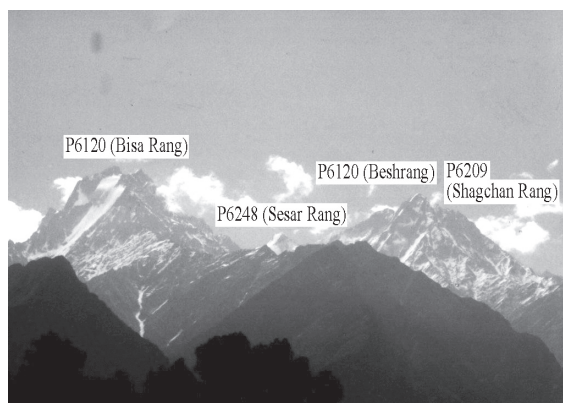


写真 2 Tirung Gad 右岸の未踏峰群

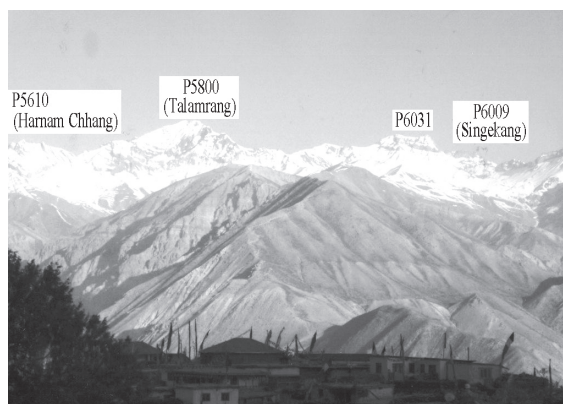


写真 3 Nako 対岸の西方の連山

た。Rakcham 村の次の支谷 Sushang Nala の奥には P6032 がある筈だが、全く奥が見えず、諦めて Sangla へ引き返すことにした。

6月18日(水):

Sangla を午前 7 時 30 分に出発。途中 Saro Garang 川で再度奥を覗いて見たが、稜線の山々は全く見えず。ゴルジュ帯の厳しい支谷



図2 Baspa River - Kalpa 周辺地図

なので、これまで登山隊のアプローチを阻んできたのであろう。9時15分にChitkul村に到着。車道はここまでのので、右岸の道を歩く。ITBPの駐屯所がMulngに最近設置されたようで、車道工事が始まっていた。しかし、車道が未だ完成していないので、ITBPの隊員たちが、Chitkul村から買い出してきた日用品を担いで、駐屯所へ運んでいた。Mulngの先の支谷Tomar Gadには、P6465の未踏峰が見える筈だが、雲にかくれて姿を現さない。P6465の北東に未踏のP6447が位置しており、その更に北東には、1994年の英印合同隊（英国側Chris Bonington隊長、インド側Haris Kapaida隊長）が、北のTirung Gad川から初登頂したP6553（Rangrik Rang）がある筈。Nagast近辺で1時間ほど、雲が消えるのを待っていたが、一向に天候が回復しないので諦めてChitkulに戻ることにした。

13時15分にChitkulに戻り、昼食。昼食後、突然雲が切れて、真っ白な秀麗の未踏峰P6465が姿を現し、その左手奥（北東）に

P6447の未踏峰が頭を覗かせていた。今回Baspa Riverに入った大きな目的の一つが、P6465とP6447の山容を確認することだったので、目的の山を目にする事が出来て感無量であった。

支谷のTomar Gad氷河に入って、P6465のアプローチ・ルートを探査することが出来なかったのは残念だが、この魅力的な未踏峰に、近い将来挑戦する若者が現れるのを期待したい。

Chitkulでの感激のひと時を過ごした後、Kalpaへ移動し、KalpaのHotel Grand Shangrilaに17時15分投宿。Kalpaでも雲が天空をおおっていて、P6050（Kinner Kailash）やP6473（Jorkanden）は全く望めず。

6月19日（木）：

4時30分に起床。ようやく薄明るくなりでしたが、Kinner Kailash山塊は未だ雲に隠れて見えず。5時20分頃に朝陽が出だし、ようやく山々が見え始めた。

P6050（kinner Kailash）は、チベットの



図3 Nako - Tabo 周辺地図

カイラス山に住んでいるシバの神が、冬期に Kinner やってきて住む山と言われている聖山で、1974年にインド隊が初登頂した山である。

隣の P6473 (Jorkanden) は、1978年にインド Army 隊が初登頂している。1986年に日印女史合同隊(寺沢玲子隊長)が、Tirung Gad 川から登路をとり挑戦したが、残念ながら 5620 m で断念した。

Jorkanden につながる P6240, P5990, P5983, P6080 (Dabbling), P6080 (Siro) が既に登頂されているのかどうかと IMF に問い合わせたところ、いずれの山も未だ登頂記録がないと

の回答であった。

ホテルのベランダから朝焼けの Kinner Kailash 山塊を眺めて写真撮影をした後、車で Nako へ移動開始。Kalpa の下の Rekong Peo は、Kinner の行政中心地となっているとのことで、スイスの山村のような雰囲気のある建物が立ち並び、Raldang (5499m) という裏山が街を見下ろしている。

1時間ほど車で走り、Aren の近くより、Tirung Gad 川右岸の 6000m 峰群が仰げた。P6095 (Bisa Rang), P6248 (Sesar Rang), P6120 (Beshrang), P6209 (Shagchan Rang)

が連なり、名前がつけられているので既に登頂されているものと想像していたが、IMFからは登頂記録がないとの回答であった。

Kaから南を眺めると、支谷のTiang Lungpaの右岸の山々であるP6030 (Gangchhua), P5935, P5965の連山が望めた。P6030 (Gangchua)は、1992年にインドArmy隊が初登頂。

Puhで出会った日本人によると、クンズム峠(4551 m)からチャンドラ河に降りる車道が崖崩れのため通行止めになっているとの事で、この方はKajaから引き返してきたそうだ。我々がKajaに入る迄には未だ十分日数があるので、さらに情報を集めた上で、今後の日程を考えることにしよう。

丘の上の村Nakoには、午後2時10分に到着した。Nakoからは、チベット文化圏に入る。Nakoのキャンプ・ホテルに投宿した後、Nako Lake及びNako Gompaを訪れた。インターネット情報では、Nako Lakeは大きな魅力的な湖のような写真がのっていたが、びっくりするほど小さな池であった。

Nako Gompaから中印国境稜線のP6791(Leo Pargial)の雄姿が望まれた。この山は、1933年に英国隊が初登頂しているが、国境稜線上の山なので、その後はインドArmyとITBP隊のみが登頂しており、外国隊には登山許可が与えられていない。

Leo Paragialの南に、Kinner山群の最高峰のP6816がある筈だが、Nakoからこの山を見ることは出来なかった。

Nako Gompaを訪れたあと、小さな売店でミネラル・ウオータを購入。ついでに1,000ルピー紙幣を、100ルピー紙幣に交換して欲しいと、店主に頼んだところ、「勿論OKですよ。日本人ですか？東京、大阪、神戸に友達たくさんいます。貴方どこから来ましたか？」と気さくに声を掛けてくれて、「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、…」と日本語で100ルピー札を勘定し、「はい、センルピーです」と渡してくれた。どうも「やばい」と感じ、彼の目の前で、私が札を勘定したら、9枚しかない。2度勘定し、「1枚たりない、900ルピーしかないですよ」と店主に突き返したら、「あ、間違っていましたか」と、しれっとして100ルピー札を差し出してきた。油断も隙もない、インド商人の常套手段だ。ガイド

のツワン君が、「騙されずにすみませぬね」とホッとしていた。

Nakoの対岸の西方には、P6009 (Singekang), P6031, P5800 (Talamrang), P5610 (Hernam Chhang)の連山が翼を広げているのが、ホテルから眺められた。

6月20日(金) :

Nakoを朝7時40分に出発。Leo Pargialの北には、P6040, P6075, P6228, P6173 (Ningmad), P6648 (Ninjeri), P6303, P6484, P6215, P6100等の未踏の6000 m峰がある筈だが、支谷が峡谷になっていて、奥の方の山々は車道から全く覗くことができなかった。

チェック・ポストのあるSumdoでパスポートを提示した後、午後2時にTaboに到着した。Tabo村の手前から、Taboの北面の裏山の素晴らしい景観が眺められた。

Tabo Gompaは、土壁で出来た平屋建てのこじんまりとしたチベット仏教の寺院だが、ラダックのアルチ・ゴンパに匹敵するカシミール調の素晴らしい仏像や壁画を鑑賞する事が出来た。

6月21日(土) :

Taboから日帰り、Dhankar Gompaを訪れた。小さなお寺で、壁画は相当傷んでいた。そのあと、Lalung Gompaを訪問し、素晴らしい仏像を拝観した。Lalung Gompaから南西の方向に、P5902 (Kamelang)が眺められた。

6月22日(日) :

いよいよPin Riverに入る日だ。Taboをたち、Pin RiverのKungri Gompaに先ずお参りした。小さな寺院だが、新しい本堂が建設されていた。11時30分にSagnam村に到着。

SagnamはPin Riverの左股・右股の合流点にある、開けた明るい台地の村だ。チベット民家に宿をとったが、2階に客室があり、大きなトイレには水道がまったくなく、トイレ前の200リッターのプラスチック・タンクからその都度バケツに水をくんで、1回ずつ排水をせねばならないという、大変不便な民宿であった。勿論、シャワーも使えず、洗面も使用不可能な状態で、驚きの民宿であった。女性の小林さんには、大変だったであろう。

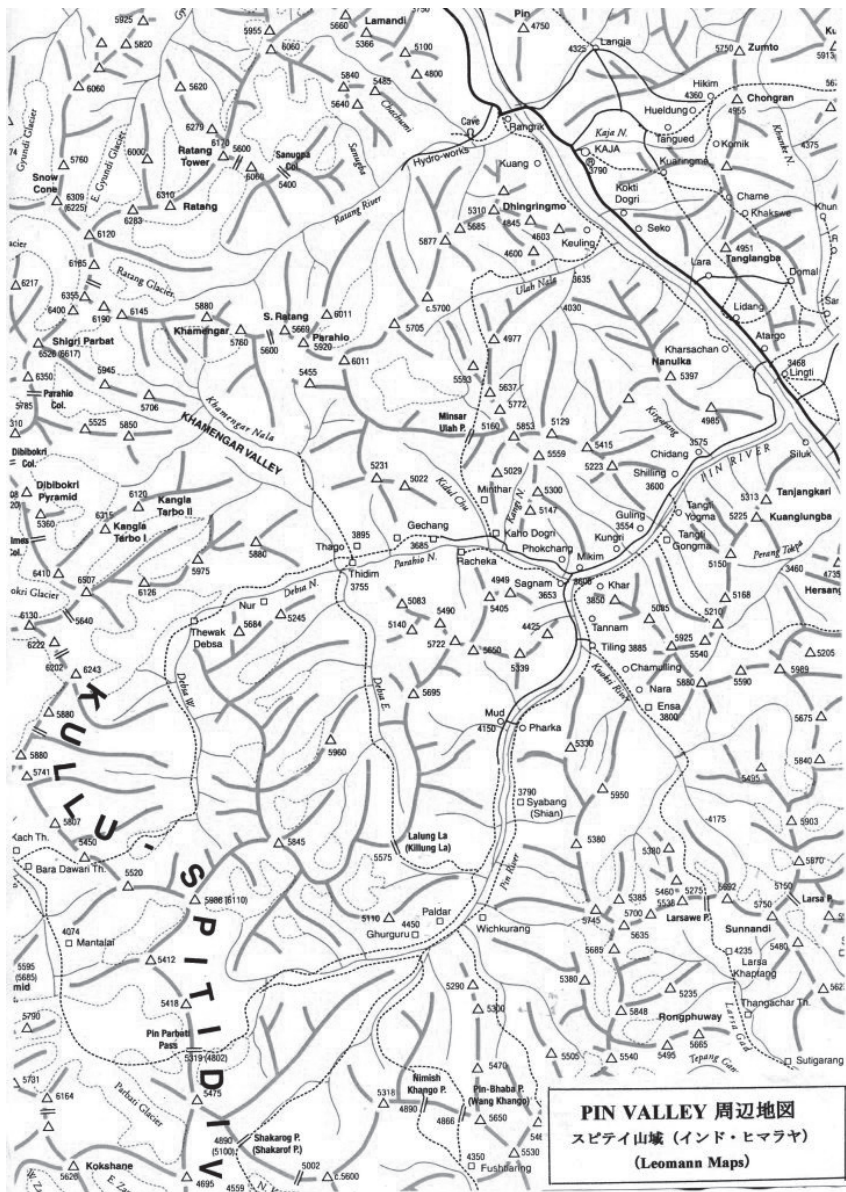


図4 Pin Valley 周辺地図

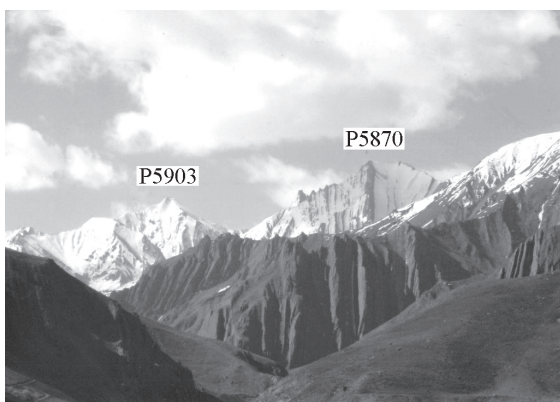


写真4 Pin River 左股の支谷 Kuokti River 奥の秀峰

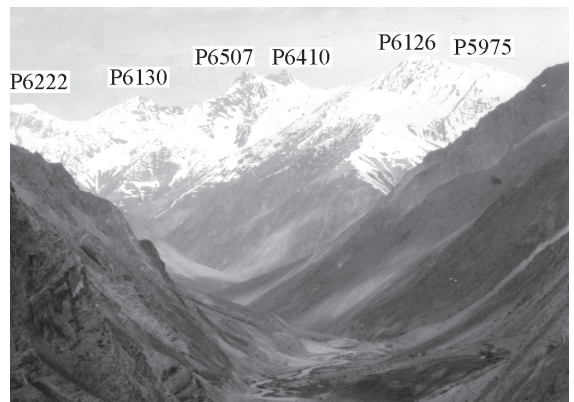


写真5 Pin River 右股 Debsa Nala の未踏峰群

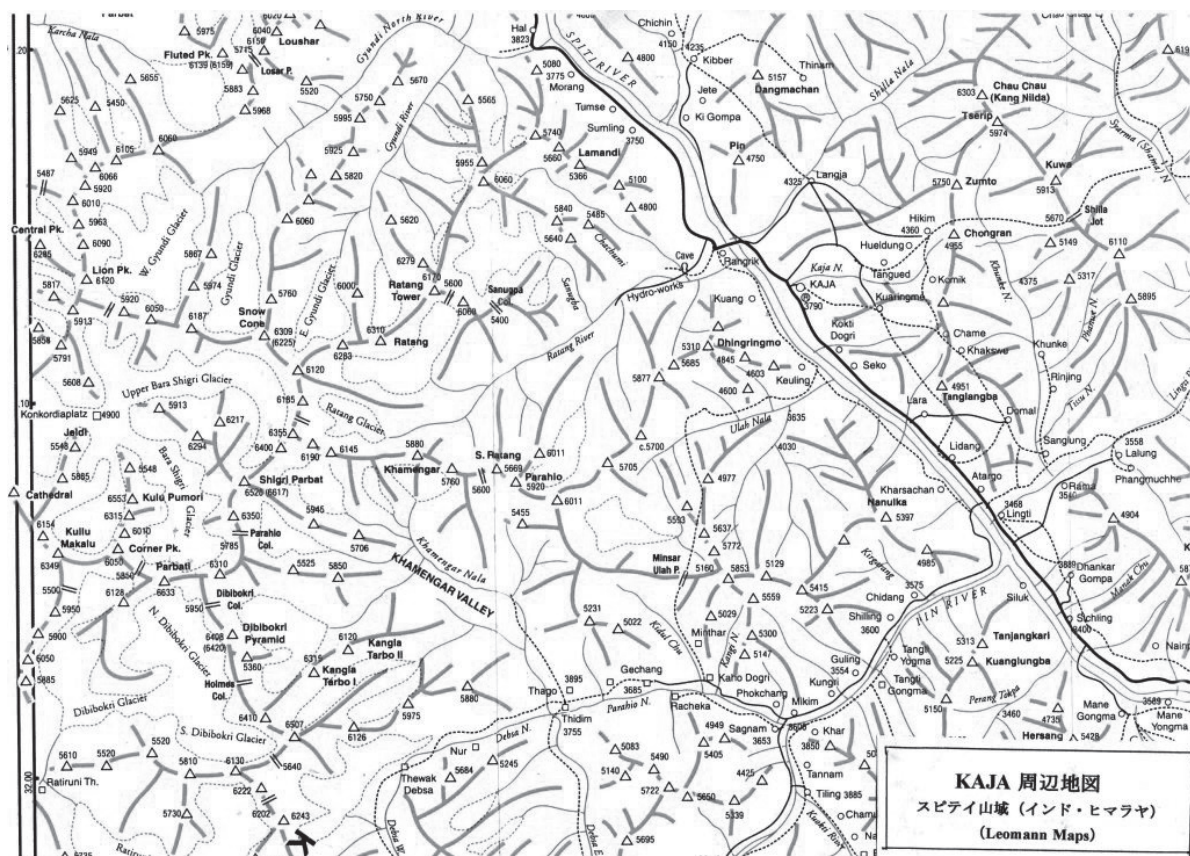


図5 Kaja周辺地図

午後、約1時間掛けてPin River左股のMud村まで出かけた。Mud村手前から南東に入っている支谷Kuokti Riverの奥に、白銀に輝く秀麗なP5903とP5870の鋭鋒が腰を据えていた。小雨もパラパラと振り出し、天候が芳しくないので、Mud村の対岸の台地から引き返した。

6月23日(月)：

Pin River右股は、Leomann MapsではGechangまで車道がついており、数年前からThidimまで車道が延長されたとの噂も聞いていたが、実際はSagnamから20分ほど車で走ったKaa村までしか車は入れなかった。Kaa村に駐車して、8時15分に細い崖道を上り下りして、Pin River右股本流に降り立った。Thidimはすぐ近くに見えるが、一向に近づかない。Gechangを過ぎたあたりから、右股奥にP5975, P6126, P6410, P6507, P6130の未踏峰群が眺められた。P6507は、非常に魅力的な山だ。

ThidimからKhamengar Valleyを遡行してこ

の谷を取り巻く未踏峰群を見てきたいと期待していたが、日帰りではとても無理と判断。昼過ぎになったので、Thidimの手前より残念ながら引き返し、午後4時にKaaに帰着した。

Pin River右股を本格的に探査しようと思えば、少なくともThidimにBCを設営し、3日ほど掛けてKhamengar ValleyとDebsa Nalaを遡行する計画にすべきだったと深く反省。

6月24日(火)：

再度Pin Riverの左股に出かけることにした。8時にSagnamを出発し、Mud村から歩き始める。広く開けた台地状の左股は放牧に適しており、放牧小屋が何軒かたっていた。数百等の山羊の群れが放牧されており、のどかな風景である。左股の正面奥にどっしりとした山容のP5650が腰をすえており、その東にPin-Bhaba Passという峠道が通っている。ThidimからDebsa East谷を越えるLalung Laからのトレッキング道と合流するあたりで、Mud村へ引き返すことにした(午前11時45分)。Pin River

左股には、6000 m 峰はないが、開けた明るいとても気持ちのよい谷であった。

6月25日(水)：

7時40分に Sagnam をたち、9時20分に Kaja に到着。やはりクンズム峠からチャンドラ河におりる車道は、崖崩れが完全に修復されておらず、未だに通行禁止になっているとのホテルの情報だった。Kaja で3泊滞在の予定だったが、2日の宿泊にして、往路を Shimla へ引き返す事にした。

Hotel Spiti Sarai で昼食をとった後、Ki Gompa に参拝した。丘の上に聳える Ki Gompa は、なかなか格好良い。1962年に京大山岳部がラホール山群のインドラサン(6221 m)に初登頂しているが、その時の隊長であった小野寺幸之進、隊員の宮木靖雅、富田幸次郎、岩瀬時郎の4名が既に逝去しているので、Ki Gompa 本堂で般若心経を唱えさせて貰い、この4名の冥福をお祈りした。

Ki Gompa の近くのレストランで昼食をとった後、Langia へ P6303 (Chau Chau) を眺めに出かけた。高原状の村 Langia の裏に、白い Chau Chau 山が聳えている。この山は1993年にイギリス隊に初登頂され、その後数多くの遠征隊が登っている山である。日本からも群馬高校体育連盟隊が1998年に登頂している。

Langia から、対岸の Ratang River の奥の P6170 (Ratang Tower) から P6060 の稜線が遠望される。Ratang Tower は1993年に、インド隊(Haris Kapadia 隊長)が初登頂した山だ。

Ratang River の右岸には、カナデアン・ロッキーのマウント・アルバータに似た P5877 が腰を据えている。

6月26日(木)：

車酔いと高度障害の影響か、昨夜から阪本は下痢と嘔吐が激しかったので、今日1日は食事も減らし、休養する事にした。他の4名は、Rangrik の村の散策を楽しんだ。

6月27日(金)～29日(日)：

往路を Shimla まで引き返すことになり、27日は Nako まで。28日は Nako から Rampur まで行き、29日に Shimla に戻った。毎日車にゆられ、いささか疲労気味。

6月30日(月)：

Shimla の街を、散策。

7月1日(火)：

Shimla 発10時30分のトイトレンで、Kalka へ。2007年に初めてトイトレンに乗った時は、車中で傘をさして雨をしのがねばならない事に驚いた。その後、このトイトレンは、世界遺産になったらしいが、相変わらず古びた車両で、座っていると腰が痛くなるような硬い椅子は、以前と全く同じであった。おまけに今回も雨が降り出したら、以前と同様に車両の天井から雨が漏りだし、懐かしさと共に驚きのトイトレン経験となった。

午後5時30分に、Kalka で特急車に乗り換えて、Delhi へ。前菜から、スープに始まり、主食が準備されている車中のサービスに大満足だった。

デリーに2泊して、7月3日の夜11時30発の TG316 に乗り、翌朝バンコクで乗り換えて、7月4日の夕刻に帰国した。

今回はキナールからスピテイへと余りにも広大な山城を欲張って探査対象としたため、Baspa River の右岸支谷の峡谷奥の未踏峰や、Nako の北方のスピテイ河左岸支谷の未踏峰群、更に Pin Valley 右股の Khamengar Valley 周辺の未踏峰群の探査の十分な日程を組めなかったのは大きな失敗であった。でも、キナール山群及びスピテイ山群には、未だ知られていない、隠れた未踏峰が数多く実在するのを確認出来た事は、大きな収穫であった。

機会があれば、よりきめ細かい計画で、未踏峰探査に再挑戦してみたい。

今年も、Leh のエージェントである Hidden Himalaya のツワン氏と紗智夫人に大変御世話になった。心から感謝を申し上げたい。今回も愉快的な仲間との、笑いのたえない楽しい山旅であった。

編集担当者注

阪本さんのこの記事は、原稿をいただいてから掲載まで時間がかかってしまいましたこと、お詫びいたします。

同じ内容の記事は、AACK ホームページならびに「ヒマラヤ」No.470,1～11 ページ (2014 年 9 月、日本ヒマラヤ協会発行) にも掲載されています。

このニュースレターでは、残念ながら写真は

モノクロで、ごく一部 (5 枚) しか掲載しておりません。AACK ホームページには、25 枚の写真がカラーで掲載されていますので、ぜひご覧ください。

マーディ・ヒマール・トレッキング

安仁屋政武

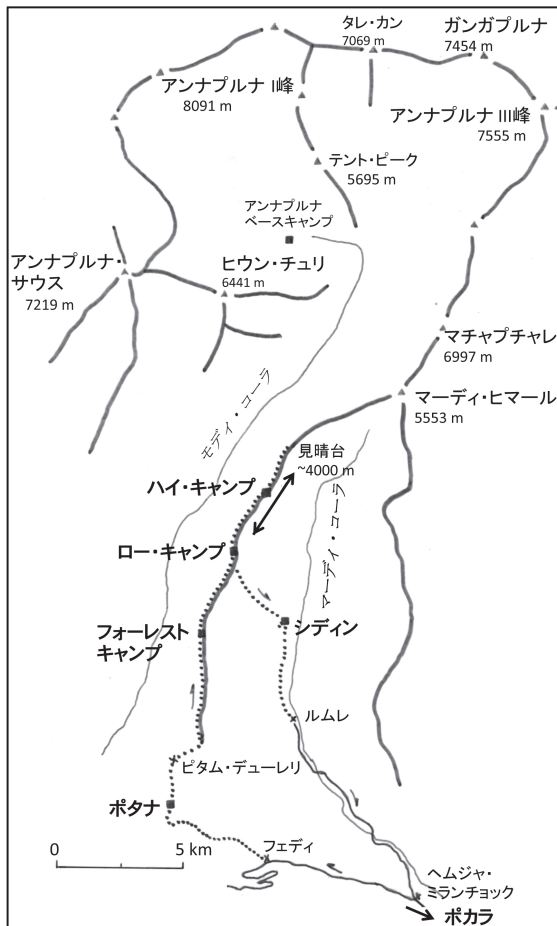
はじめに

2014 年 10 月から 11 月にかけて、第 10 回雲南懇話会フィールドワークとしてネパールのマーディ・ヒマール (Mardi Himal) のトレッキングに行ってきたので紹介する。マーディ・ヒマール・トレッキング (以降、MHT と略す) はポカラの北、マチャブチャレの手前があるマーディ・ヒマール (5553 m) の BC に行く尾根上のコースで、売りは、マチャブチャレ、

アンナプルナ山群、マナスル山群の眺望である。

今回我々が行ったのは新しく開拓された西側コースで、モディ・コーラを挟んで目の前にアンナプルナ・サウス (7219 m)、ヒウン・チュリ (6441 m) が圧倒的な迫力で迫る。北に目をやればマチャブチャレ (6997 m) が聳え立っている (地図)。

発端は 4 月に遠藤さんがコースを紹介してくれたことにある。メンバーは、AACK 関係は私、遠藤、岩脇の 3 人で、後の 3 人は北海道での山スキー仲間 (ランドネ 2 人、こなゆき 1 人) である。安仁屋・遠藤以外は、ネパールは初めてなので、帰りにポカラとカトマンズの観光を入れ 14 日間の計画とした。



行程

10月21日 (火) 成田—クアランプル—カトマンズ

成田を 11 時過ぎに発ち、カトマンズには 22 時頃 (現地時間) 着いた。出たところには手配を頼んだポカラのエージェントのガイドが出迎えに来ていた。車に荷物を積み終わったら 2 人がチップをくれという。我々は車関係の人間だと思っていたので、最初は何のことも理解できなかった。それで無視していたら、しつこく言ってくる。100 ルピーずつ渡したが、さらに、ドルか円でよこせという。最初はなんと 20 ドルよこせという。馬鹿言うな、とけんか腰で言ったら、最後には 1 人 1 ドルでいいと言う。彼らは夜中に着いた慣れない客をこのようにカモにしているゴロのようだ。

10月22日 (水) カトマンズ—ポカラ (バス) (快晴)

今回、途中の地形や町も見たいということで

敢えて移動にバスを使った。約 200 km の距離を 7-8 時間で行く。グリーンラインというもっぱら観光客相手のバスである。カトマンズ盆地を抜ける峠道はものすごい渋滞で、バスは 1 時間以上遅れた。昼飯はカトマンズから 80 km 位の所にある Riverside Spring Resort で、ビュッフェ・ランチであった。ここでチトワン国立公園のサファリに行く人はバスを乗り換える。

天気が良いので、ヒマラヤの高峰がバスから見える。アンナプルナ II, IV 峰が一際目立つ。マナスル山群も見えているはずだが、どれがどれだか分からない。やがて、マチャプチャレが大きく見えるようになり、ポカラには 1 時間半遅れで到着した。Lakeside 地区にあるホテルに行く。韓国料理屋が併設されている。一段落したところで、エイジェントの代表 Bijay がホテルにやってきた。彼はライ族 (Rai) でスタッフの多くもライ族である。

10 月 23 日 (木) ポカラ滞在 (快晴)

朝、湖畔を散歩する。天気が良く、山もよく見え、人出が多い。湖にボートを浮かべるアベック、家族連れの地元民も多い。午前中、Bijay の自宅 (オフィスは別にあるが、ここで実際の仕事をやっている) に行き、代金の残りを支払う。

行く途中、町がなにか華やいだ雰囲気だったので、聞いたら、なんでも、昨日から今週末にかけてヒンドゥー教のお祭りで学校は休みとのこと。そこそこに踊っている集団がいる。ガイドに聞くと、日本でいう‘連’みたいな集団があるそうだ。踊りながら、寄付を集めている。これらは恵まれない人達へのチャリティとなるそうだ。観光客が多く集まるレストランの前では 2-3 時間やっている。

夕方、我々の装備チェックを行った。夕飯は観光客用のレストランを避けてインド料理屋へ入った。若いウェーターは勤めて間もないらしく、動きが鈍く料理のことを訪ねても要領を得ず、注文も満足に受けられなかった。しばらくしてオーナーが来て指示を出し始めたら、人が変わったように動き出した。

10 月 24 日 (金) ポカラ—フェディ (Phedi)—ダンプス (Dhampus)—ポタナ (Pothana) (曇りのち晴)

9 時前に出発。車で 30 分弱、トレッキングの起点のフェディに着く。ここで高度計を地図の標高 1130 m にセットする。ここからは立派な幅広の村を結ぶ生活路である階段道を、アシスタント・ガイドが先頭で行く。彼はギターを背負っている。道中、そこここでヒンドゥーの祭りの一環として子供達が寄付を求めてしっかりと手を繋ぎ、通せんぼしている。原則として各自寄付しないと通さない。小銭がないと困る。いい小遣い稼ぎのチャンスである。逃げ回っているトレッカーもいた。

ダンプスで最初のチェックポイントを通過する。こんな所にも日本語学校があった。昼食は小高い丘の上にあるゲストハウスで摂った。尾根の上に集落がある。思わず、水はどこから引いているのだろうかと思った。

今夜の泊まり場、ポタナには 15 時前に着いた。尾根上にある集落で賑わっている。ゲストハウスにはプロパンガスでお湯を沸かすシャワーも備わり、1 回 100 ルピーで、時間制限なく使えたそうだ。エイジェントが用意した寝袋はノースフェイスの中綿で嵩張るが快適だった。

10 月 25 日 (土) ポタナ—フォーレスト・キャンプ (Forest Camp, 2370 m) (時々曇り、霧、雷雨)

6 時過ぎ、マチャプチャレ、アンナプルナ南峰などが見えたが、すぐに隠れた。今日も晴れだ。8 時過ぎに出発。分岐点のピタム・デューラリに 9 時過ぎに着く。賑やかだ。ここで ABC (Annapurna Base Camp) トレックと分かれる。お茶を飲みながらのんびりする。目の前のアンナプルナ・サウスが見事である。1964 年、我々の身近な仲間が初登頂した山だと思つと感慨深いものがあつた。客のほとんどはヨーロッパ人で、なにかヨーロッパの山小屋にいるような雰囲気である。

ここから MHT が始まるが、今までの街道路と違って森林帯の山道となる。やがて霧が出てきて涼しくなる。途中、チベット・パンと蜂蜜の昼食を摂る。草むらには蛭がいた。山道は尾根筋ではなく、山腹を捲くようについている。

フォーレスト・キャンプには 2 時前に着いた。

時々日が照るが、霧だ。間食に‘モモ’（ネパール水餃子）を注文する。注文してから出てくるまで90分ぐらいかかった。ここから上はすべて注文を受けてから料理を始めるので、出てくるまで大体2時間、あるいは3時間近くかかった。また、卵はあるけれど、鶏肉はなかった。夕方9人の大部隊がやってきた。

夕食の最中、稲光が走り雷が鳴り始め、まもなく、雷雨となった。雹が混じっていて、地面はうすすらと白くなった。夕食後、ガイドのナーゲンがギターを弾き、アシスタント・ガイドのマンが太鼓をたたき、みんなで歌いながらポーター達が踊りに興じた。ギターはこのために持ってきたのだ。寝袋に入った直後から一時猛烈な降りになった。明日の山道が思いやられる。

10月26日(日)フォーレスト・キャンプ—ロー・キャンプ (Low Camp, 2895 m (高度計)、表示によると 2970 m) (晴れ、にわか雨・雹)

昨夜の雷雨で3500 mぐらいまで雪で白くなっていた。8時過ぎに出発。幸いなことに山道は意外と乾いていた。間もなくレス・キャンプ (2525 m) に着き、マチャプチャレとマーディ・ヒマールを目の前にお茶を飲む。太陽が照りつけ、暑い。石楠花が2800 mぐらいから出てくる。日本では見られない大木だ。ネパールの国花で花の色は19色、西ネパールでは5色あるそうだ。花が咲く3月下旬から4月にかけてきたら見事だろう。

ロー・キャンプには10時半過ぎに着いた。長い休みも入れて僅か2時間半である。ガイドは4時間の行程だと言っていた。どうも、ガイドブックやガイドの言う時間と実際に歩く時間がかなり違う。開けていて気持ちがいいが、トイレは最悪に汚かった。昼食に焼飯を注文し、日向ぼっこをしていると、甲高い女の声が聞こえ、5人の若い中国人のグループ（女3人、男2人）が上から降りてきた。中国人はどこにいてもうるさい。12時前、突然雨が降り出しまもなく雹となった。ストーブを焚く。1時間ほどで止み、太陽が出て再び暖かくなった。しかし、夕方までに何回か雹が降った。夕食に焼きそばを注文したら、日本のインスタント焼きそばがでてきたのには一同びっくり。ハイ・キャンプでは高度のことを考え、酒を飲まないこと

にして、持ってきた酒を干す。

10月27日(月)ロー・キャンプ—ハイ・キャンプ (High Camp, 3430 m (高度計)、3550 m (表示)) (晴れ、雹、みぞれ、曇り)

素晴らしい天気で、雹が降りている。目の前にマチャプチャレが中央に、その左にアンナプルナ III、右側に IV と II、そして手前に重なってマーディ・ヒマールが見える。まもなく雲が出て山は見えなくなる。朝食が遅れ9時前に出発。シャクナゲ林に行くが、高さ20 mぐらいある大木である。3100 m以上で森林限界となり、ここから尾根筋の道となる。ヤクの糞に混じって馬の糞があるのでガイドに尋ねたら、ラバでハイ・キャンプの物資を週2回程度運んでいるそうだ。11時に曇りとなり、寒くなる。3400 mぐらいで霧の中に入る。

ハイ・キャンプには霧の中、昼前にあっけなく着いた。寒く、着込む。食堂小屋は9人の比較的若いイスラエル人のパーティで混んでいる。フォーレスト・キャンプに夕方着いて宿探しに苦労していた連中だ。食事はパーティ毎に順番待ちだ。昼食はチャパティとカレー（肉なし）にした。2時頃雹が降り始め、みぞれ交じり、雪になって地面は白くなった。日が落ちる直前5分間ぐらい山が見えた。

10月28日(火)ハイ・キャンプ—見晴台—ハイ・キャンプ (晴れ、雹、雨、雪、曇り、晴れ)

昨日、8時には雲が出てきて山が見えなくなる、と聞いていたので、朝食はポーターが後から持ってくるよう算段して5時40分頃出発した。道は若干凍っている。素手では手がかじかむ。日の出直前に見晴らしの良い高まりに着き、赤く染まる山々を撮った（写真）。が、モルゲンロートは思った程、綺麗ではなかった。日が出ると急速に暖かくなり、着込んでいた衣類を脱ぐ。マチャプチャレは7時過ぎに雲で隠れ、アンナプルナ・サウスは8時過ぎに見えなくなった。4000 m ちよつとの高まりからガンガプルナが一瞬見えた。下りは凍っていた地面が融け、いやらしく滑るので杖が役にたった。今日はハイ・キャンプに泊まるので、できるだけ時間を費やしながら下る。それでも10時20分頃にはキャンプに戻った。この頃までに霧が濃くなり、何も見えなくなった。

11時半頃突然、電が降り始めた。お馴染みだ。みぞれになったり雪になったりする。続々と電みぞれでずぶ濡れになったパーティが上がってくる。いろいろな国の人間がいたが、なかにはマナーの悪い連中もいた。極めつけは狭い食堂で昼食後いきなり大麻らしきものを吸い始めたイギリス人4人（男2人、女2人）のパーティであった。さすがに”Behave yourself”と言ってたしなめた。彼らは宿舎でも寝る前に大声で喋り散らしていた。

単独のイタリア人がいた。彼はベニスから来ているそうで、アルプスでは登山はおろかハイキングすらしたことが無いという。しかし、ここ10年ほど毎年この時期にネパールにトレッキングに来ているという。きっかけを聞いたら、10年前、ボランティアでカトマンズの子供達の世話に来たとき、山の美しさに魅了され、それ以来休暇は全てネパールとその周辺で過ごしているという。彼のトレッキングの日程は我々の半分ぐらいである。1人なので毎日目一杯歩くようにしているそうだ。確かに我々のように小屋に早く着いても1人ではやることがない。せいぜい本を読むくらいだ。その点、我々は6人なので話には不自由しない。日本から持ってきたつまみで、酒を飲みながら、楽しく過ごしてきた。他のパーティはトランプに興じているのが多い。

皆の体調がいいので、昼食後禁酒を破りネパール製のウイスキーを買って呑む。おやつにMars RollとSnickers Rollを食べた。これはMars barあるいはSnickersをチャパティで巻き、油で揚げたものである。チョコレートが溶

けて疲れた身体には美味しい。夕方アーベント・ロートの山を撮る。夜空の星が見事で、ポカラの町が思ったより明るく綺麗である。

10月29日（水）ハイ・キャンプロー・キャンプシディン（Sidhing, 1700 m）（曇り、雷雨、晴れ）

例のマナーの悪いイギリス人は5時前に起きて大声で喋っている。今日は早朝から天気が悪く、山は雲に隠れている。我々は良いときに登った。出発してすぐに霧がかかり始めた。森林限界近くで20人ぐらいのヨーロッパ人の大集団とすれ違う。

ロー・キャンプには霧の中9時17分頃着いた。ここからすぐにシディンに下る道に分かれる。11時過ぎ、昼飯を持ったガイドが追いついてきて見晴らしの良いところでパンケーキと蜂蜜の昼食を摂る。明日車で下るマーディ・コーラが見える。12時頃、すぐ下、尾根の上にしやれた1軒屋の建物が見えた。今日の泊まり場、シディンの新しいホテルだという。俄然元気が出る。ホテルの100mぐらい手前で突然、‘バン’と大きな音がした。一瞬なにごとか、と思ったが雷であった。そしてホテルに入る直前に降り出してきた。全く、信じられないタイミングである。全行程を通じて、行動中雨に遭わなかった。早立ち早着きのお陰である。

しばらくして、イスラエル人パーティ9人が雷雨でずぶ濡れになって到着した。彼らは昨日、日の出を見た後、雨の中をロー・キャンプに下った。我々が今朝、ロー・キャンプに到着した時は、まだ起きていなかった。おやつにモモと春



写真1 アンナプルナ・サウス (7219 m)。1964年京大山岳部が初登頂した (2014年10月28日6時15分頃撮影)。



写真2 マチャプチャレ (6997 m)。マーディ・ヒマール (5553 m) は手前右側に重なって見える (2014年10月28日6時17分頃撮影)。

巻を食べた。ガイドが今日の晩飯はチキン・カレーだという。歓声が上がる。5日振りの肉である。19時頃、ガイドとアシスタント・ガイドが生きた鶏を自慢そうに抱えてきた。往復4時間かけて、下の部落から買って来たという。さばいてチキン・カレーが出てきたのは20時前であった。新鮮でとても美味しかった。

夕食前、ガイドは我々にネパールの歌と踊りに興味があるかと聞き、あるなら村人達が披露する、と言ってきた。寄付金1人200ルピー程度で良いという。このようにして集めたお金はプールして、村で災害などがあったときの救済などに当てるといふ。20時半頃子供じばばを交えた10人ぐらいがやってくる。ガイドのナーゲンがギターを弾き、アシスタント・ガイドのマンが太鼓をたたく。少女がタンバリンをたたく。楽器と歌に合わせて若い女性とポーター達が踊り出す。そのうち、女性達が我々を踊りに引っ張り出す。見よう見まねで皆踊る。寄付をして、マリゴールドの花のレイを贈られ、額に赤い紅を塗られて、我々は22時過ぎに部屋に戻ったが、彼らはもうしばらく続けていた。

10月30日(木) シディンールムレ (Lumre) バス—ヘムジャ・ミランチョック (Hemja Milanchok) 車—ポカラ (快晴)

快晴で、ホテルからは素晴らしいマチャブチャレの夜明けを見ることができた。ここからは水田の間を縫って山腹についている生活道を、田舎景色とマチャブチャレを堪能しながらルムレまで行く。蝉の声が賑やかである。ルムレには10時半過ぎに着いた。11時前に中型の乗り合いバスで出発する。道路はものすごい凹凸で時速10~15kmぐらいが精一杯だ。結構乗る人がいてまもなく座席(20ぐらい)は満席となった。途中、地図では道路がマーディ・コーラを渡っているが、橋は見えない。なんと深さ30~40cm、幅3~40mの川の中を横切るのだ。河原で乗客が待っている。TATAのバスはすごい。ヘムジャ・ミランチョックには12時過ぎに着いた。

昼食の後、我々専用の車で行き、ポカラへは14時40分に着いた。ホテルに荷物を運んだ後、ガイド、アシスタント・ガイド、3人のポーター達にチップを弾み解散した。皆、陽気で良い連中だった。ガイドのナーゲンは我々をカトマン

ズまで連れて行き、空港で見送る。出発以来のシャワーでさっぱりする。高度計をチェックしたら800mであった。地図の標高と大体合っている。16時半頃、Bijayがホテルに来て、明日の予定を相談する。9時から市内観光の予定であるが、その前にフェワ湖の南にあるWorld Peace Pagodaに行き、ダウラギリ—アンナプルナ山群—マチャブチャレ—マナスル山群の大パノラマを見る希望を出した。

晩飯は、肉に飢えていたのでSteak Houseに行き皆でシャトーブリアンを食べた。1つが3人前である。レアを頼んだら、芯は冷たく(冷凍肉)焼き直しを頼んだら結局ミディアムになってしまった。しかし、肉は美味しかった。帰りに、河口慧海の「Three years in Tibet」(1995年インドで出版)を買った。

10月31日(金) ポカラ観光(晴れ)

6時にホテルを出てWorld Peace Pagodaへ行った。生憎と霧で山は見えなかった。7時半まで粘った末、ぼんやりではあるが、ダウラギリ、アンナプルナ山群、マチャブチャレは見えた。市内観光には10時前に出発。最初に訪ねたのはグルカ兵博物館(ネパールではグルカGorkhaとも言う)である。次に訪れたのは、目と鼻の先にあるセティ川のゴルジュで、上流では川幅が数十メートルあったのにここでは僅か数メートルである。

ヒンドゥー教のお寺ビンジャバシニは祭りだったのでとても賑やかで、寺の前には土産屋が並んでいる。ここからのマチャブチャレが素晴らしい。この後、Old Bazar地区を散策した。人通りがほとんどなく、レンガ作りの2階建が連なっていて、独特の雰囲気であった。

この後南下して湖の南側にあるチベット難民キャンプを訪れ、昼食後デヴィの滝と鍾乳洞を見た。最後は国際山岳博物館である。夕方だったのですいていたが、丁度私がマナスル登頂者の今西寿雄の展示物のところに来たら、地元の中学生ぐらいの団体が大挙して押し寄せ、ゆっくり見ることができなかった。田部井淳子のコーナーは彼らに占拠されてろくに見ることができなかった。

今日の夕食はエイジェントのfarewell接待で、「桃太郎」という日本料理屋である。われわれは誰一人として特に日本料理を食べたいと

は思わなかったが、彼らから見れば、日本料理屋へ招待するのが最高の接待と考えているのだろう。あるいは、接待をダシに彼らが日本料理を食べたいのかもしれない。料理人はもちろん、全部ネパール人である。料理はそこそこと言うべきか。我々が多量のビールを飲んだので、酒代は我々持ちとなった。

11月1日(土) ポカラーカトマンズ(曇り、霧、時々晴)

再びグリーンラインのバスでカトマンズまで行く。生憎と曇りでヒマラヤの高峰はアンナプルナIIを最後になにも見えなかった。昼食は行きと同じ場所であった。トリスリ川では沢山のラフティングを見る。支流のアグラ川に入ると砂利採取がそこそこに見られる。峠の渋滞は思ったほどでは無かった。ネパールでは土曜が休日なのでトラックの量が少なかったようだ。カトマンズのバス停には15時、予定通り着いた。ホテルにチェックインした後、皆でターメル地区を歩く。Pilgrims Bookstoreに行ったら建物は無く、仮の店舗で営業しているとのことであった。後で知ったが、2013年5月16日に火事で全焼し、建物を再建している最中とのことであった。

夕食はガイドのナーゲンの案内でタカリ族のレストランに行った。蕎麦がきが出てきて楽しんだ。地元民しかいないレストランであった。

11月2日(日) カトマンズ市内観光(快晴)

朝冷えて、ダウンジャケットを着込む。8時過ぎに出発。朝早いので最初の訪問地、ブーダ・ストゥーパまですいすい行った。太陽が出てきて急速に暖かくなる。そんなに混んでいない。ヒンドゥー教の聖地パシュパティナートもそれほど混んでいなかった。バグマティ川沿いの石の台では火葬が絶えない。偶然にも老女を火葬にふす前の一連の手順を見ることができた。頭から足までオレンジ色の布でくるんだ遺体を斜めに傾いている石の台に横たえ、足を川に浸けた。それから顔を覆っていた部分をめくり、家族・縁者が口に水を含ませながら別れを告げている。娘さんとおぼしき人はその後泣き崩れて抱えられた。このようなプライベートなことが一部始終観光客を含む公衆の面前で行われることになにか複雑な気持ちであった。

昼食は町の中心街にあるネワール族の高級レストランであった。チキン・カレーとダルバートであったが、今まで食べたどれよりも美味しかった。昼食後訪れたスワヤンブー・マハチャイチャの入場切符売りの女性は、今日のガイドの奥さんだという。タカリ族のガイドは嬉しそうであった。

この後、町の中心にあるダーバー広場に行く予定であったが、皆人混み・騒音に疲れたので、ホテルに帰ることにした。ホテルには15時過ぎに戻り、各自が今まで撮った写真を写真記録係のIさんのPCにコピーした。後日、皆の写真を時系列に並べて、我々に送ってくれることになっている。

最後の晩の夕食はガイド同伴でステーキ・ハウス・エベレストに行った。結構混んでいて、間もなく満席となった。さすが肉も美味しいし焼き方も注文通りでパーフェクトであった。

11月3日(月) カトマンズ—クアラルンプル

空港への出発まで、早朝の町に出てルピーを使い切った。店の前は掃除をして水をまいている所もあり、結構綺麗だ。これが昼過ぎにはゴミだらけ、埃だらけになる。ガイドのナーゲンが空港まで案内してくれる。11時前に着く。空港はかなり混雑している。

ターミナルビルに入るのに荷物のX線検査を受ける。それから切符カウンターに行き搭乗手続きをする。機内持ち込み荷物の検査は、男専用が2列、女専用が1列である。最初は知らずに行列が一番短い真ん中の列に並んだら女性専用であった。

14時過ぎに離陸。しばらく雲の上に7-8000m峰の山々が見えていたが、どれがどの山か全く分からなかった。テライを過ぎたら雲で下はなにも見えなくなった。プーケットの夜景は素晴らしかった。クアラルンプル着21時前。成田便は23:46分離陸。

11月4日(火) クアラルンプル—成田

マレーシア航空のCAのサービスは思っていたほど良くはなかった。10何年か前乗ったときは良い印象を持ったのだが。事故の影響があるのだろうか。成田着朝7時過ぎ。機会を見つけて打ち上げをやろうと言って分かれ、楽しかった6人の旅は終わった。

図書紹介

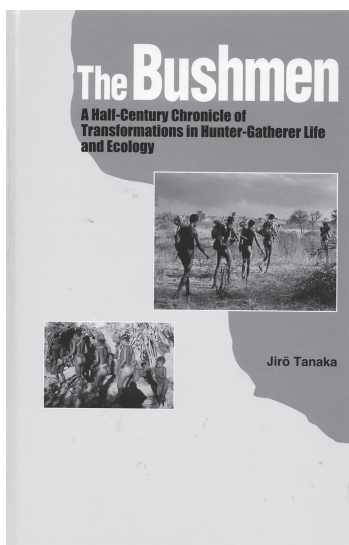
The Bushmen: A Half Century Chronicle of Transformations in Hunter-Gatherer Life and Ecology. By Jirō Tanaka, translated by Minako Sato. Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2014. 272p.

安仁屋政武

この本は、田中二郎さんが2008年に昭和堂より出版した「ブッシュマン、永遠に。—変容を迫られるアフリカの狩猟採集民」の英訳に新しく書き下ろした章を加えたもので、50年近くに及ぶ観察・調査成果の集大成である。

パタゴニアの氷河研究を行っている私がこのような本を読んで紹介するのが奇異に思う人も多いと思うので、経緯を少し説明する。私は学部で地理学を専攻していたとき、人類学にもかなり興味を持っていた。理学部の石田さんの自然人類学の講義を潜りで聞いたくらいである。しかし、最終的には私のような者には人間は複雑すぎるので、自然相手の研究にした。それで、趣味として人類学の本をアメリカでも幾つか読んでいた。今回、ジローさんの本の英訳が出るというのをフェイスブックで知り、読もうと思った次第である。

私は入部した63年5月の連休にジローさんに由良川源流に連れて行ってもらって以来、なにかとお世話になっている。ジローさんの現役時代の華々しい登山歴を知る人間にとって、卒業したらすっぱり山を止めたことが不思議であった。が、この本を読んで理由が分かった。



このような長期の調査をするのであれば、山に行く時間は文字通りなかったからである。

前半はブッシュマンの生活を細かく観察して、狩猟・採集活動を細かく記載している。そしてこれらに基づき社会構造を論じている。このなかで特に印象的なのは過去を振り返らないし未来を考えないという徹底した‘現実主義’である。この背景には‘明日はなんとかなるさ’という‘楽観主義’がある。これを支えているのが富の分配という‘平等主義’である。自分が獲物を捕ったら聚落の皆に公平に分配する、自分に食べるものがなく他の人が獲物を仕留めたらご相伴にあずかる、という仕組みである。短期間で居住地を移動するので、生活道具は最低限のものしか持たないし、貯蔵はしない。同じ地に居住する仲間の頻繁な離合集散もカラハリの厳しい環境（部外者は一般にこのような認識であるが、現実にはそうではないとのことである。年降水量400mm程度とのことで、西部劇でお馴染みのアメリカ西部のインディアンもこのような環境で生活している）に対応するために長い時間をかけてできあがった社会構造の一つである。カラハリでは太陽が諸悪の根源であるという。世界には太陽を神と崇める民族が多いのに！驚きである。が、自然環境を考えたら納得もする。

狩猟対象の動物、採集植物のリスト、昆虫（食虫を含めて）のリストなど他の研究者の成果も交えて細かく紹介している。著者はおそらく彼らが食べるものは全て試食したと思うが、その評価が一部の食べ物だけで、全てにあったら面白いのに、と思った。

後半の、1980年代に始まるブッシュマン社会の変容でのところでは、プロジェクトの詳しい経緯や行動が読み物風に書かれており、読んでいて臨場感があり面白い。研究者仲間の名前が沢山出てくるが、筑波大の同僚（遊び仲間）

を通じて会ったことがある人や、名前も聞いていたりしたので親近感が湧き、‘へー彼が！’ということで、これが一層面白く読んだ要因の一つである。次々と後続の研究者をリクルートして研究を継続させ、新たな展開をしていったのは、ジローさんのリーダーシップの賜であろう。

政府の定住政策によって何千年、何万年も続けてきた狩猟・採集生活が一変し、政府による食料の配給や年金、建設等の賃金労働に頼る生活になった。人間としての尊厳を失い、生活に張りが無くなったのは当然である。これにより‘平等主義’を貫くことが不可能になり、格差が生まれていった。このような定住によるブッシュマンの生活・社会が劇的に変化したのを目の当たりにするのは、近代化の波を受け入れざるを得ないと知っていて理解しても、昔を知る著者にとってとまどいであり、苦痛であったのではないかと推察する。特に、現金を与えられ、導入されたアルコールに溺れ、破滅していく姿を見るのは、怒りに近いものを感じただろう。ブッシュマンの伝統的生活を無視した政府の強引で急激な定住政策の犠牲者である。何か所かで、政府の定住政策は急ぎすぎたと言っている。ITの発達によって瞬時にして世界の情報が流れる今日、ブッシュマンといえども昔ながらの狩猟・採集のみで生活を送るのは不可能であることは誰もが分かっている。この伝統的生活から近代生活への transition をいかにスムーズに行うかが問題である。このような政策立案へ日本・欧米のブッシュマン研究者達の成果が生かされなかったのは、齒がゆかったに違いない。

何か所かで、著者の提言が出てくるのはこのようなもどかしさがあったからだろう。同じような問題が、アメリカ・インディアンやアラスカ・イヌイトで起きたし、現在では中国やモンゴルの遊牧民の定住政策でも起きている。

地理学出身の紹介者は、もう少し詳しい地図があったら、人の動きなどがもう少しよく分かったのに、という感想を持った。

最後に、彼らがどのような生活・社会を築いていくか予測するのは困難だと言いつつ、過去30年間の定住政策の元で様々な新しい環境変化に適応して行く様を見ていたら、21世紀へ向けて逞しく適応し続けるだろう、と述べているのが救いで、著者の希望に満ちたやさしい眼差しが読みとれる。

英語版へのプロローグで、ブッシュマンは現在2つの世界をまたいで生きていると言っている。‘もともと生活していた場所での狩猟・採集民として’、もう一つは‘新しい定住地での近代化された生活’である。すなわち、普段は定住地から若干離れたところで以前と同じような生活を送り、必要に応じて井戸がある定住地に水を汲みに来たり、あるいは生活物資を購入しに来たりする、という生活である。紹介者は、ひょっとしてこのような生活スタイルが、ストレスがミニマムな Transition かな、という印象を持った。

このような形で50年に及ぶ研究成果を世界に発信したのは素晴らしい。そして、研究者としてこのような本を上梓できた喜びと幸せを噛みしめているに違いないと思う。

図書紹介

宇野 佐 著「国立公園に魅せられて ―自然公園行政に関わった三十年の追憶―」（2013年7月31日発行、私家版、209ページ）を読んで

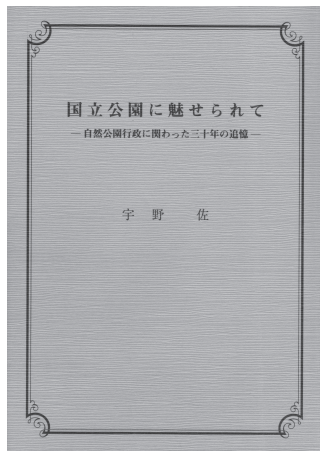
横山宏太郎

はじめに

昨年のことになるが、大先輩の宇野 佐さんから、「国立公園に魅せられて」という著書をいただいた。副題は、「自然公園行政に関わった三十年の追憶」とある（以下、本書と呼ぶ）。宇野さんは、私が武庫川女子大学でお世話になった安田 武先生と大学で同級生とお聞きし、たしか研究室を訪問された折にご挨拶した

ように思うが、記憶定かでないのは恥ずかしく、また申し訳ないことである。

私が AACK に入会したところには環境庁におられたわけであるが、名簿の勤務先が「環境庁」というほかには、お仕事の内容はまったく知らなかった。本書を読んで、私が登山や旅行などで訪れた各地のさまざまな事柄に宇野さんが深く関係しておられたことがわかり、驚くととも



その後、自然保護、環境保全、国立公園の維持管理等に関連する団体の役員等を勤める

厚生省国立公園部へ

幼少からご父君の影響もあり、自然に親しみ、キャンプ、岩登りやスキーを楽しんでいた。そのようなことから大学では林学科を選び、造園学研究室に進むが、就職に当たって偶然に（と書いておられる）厚生省に国立公園部という部署があることを知り、それが造園学の新しい分野で、しかも自分に最も相応しく、最も興味の持てる分野と感じて、その道に進まれた。幾つもの偶然の重なりが、「国立公園」との生涯の関わりを決定づけた、と言われる。

時代的な背景をみよう。国立公園法は昭和6年（1931）に制定され、第二次大戦終戦までには、12の国立公園が指定されていた。戦後、地方では観光事業によって地域振興を図ろうと、国立公園の指定を得ようという動きが活発になった。新しい国立公園行政の組織として、昭和23年に、厚生省に国立公園部が誕生した。宇野さんは昭和25年に同部計画課に配属になる。まさに新しい時代の国立公園行政が始まることから宇野さんは関わってこられたということが出来るだろう。

ところで、日本の国立公園の制度は米国のそれを参考にはしたが、国情の違いから異なったものとなった。米国では基本的には国有地を国立公園としているのに対して、日本の国立公園は土地の所有者が誰かには関係なく、地域として指定する。そのため国有地、民有地などが含まれており、産業や生活がある。もう一つは、当初から国立公園を外貨獲得の手段と認識していた、すなわち国立公園法制定の直接の動機の中に、昭和の大恐慌からの回復のため、海外から観光客を誘致しようという意図があったとのことである。このため、「理想と現実のギャップに悩まされ続けた」と書いておられる。

宇野さんが入省された当時は、国立公園の指定を待つ候補地が目白押しの状態であった。そのため宇野さんは現地調査のため各地に赴くことになった。7月に厚生技官に任官し、8月には白山の調査、ついで北海道の調査に赴く。いずれも交通機関や道路の事情が現在とはまったく違い、いろいろな苦労があったようである。特に北海道では、台風接近による豪雨で鉄橋が

に、ニュースレターでご紹介したいと考えた。しかし内容があまりに豊富で、私の力が足らず、本書に著された宇野さんの歩みのごく一部だけの紹介になってしまったこともお詫びしなければならない。ともかく、間違いのないように、略歴をお尋ねした。

宇野 佐（うの・たすく）さんの略歴

昭和2年（1927）兵庫県西宮市今津に生まれる。

ご父君、源三郎氏は、初期の日本山岳会会員、大阪市内で事業を営むとともに山好きの青年を集め、登山倶楽部を運営されていた。

昭和15年（1940）私立六甲中学（神戸市）入学
山岳部に入り、ドイツ人教師からロッククライミング技術を習得

昭和18年（1943）海軍兵学校（江田島）入校

昭和20年（1945）8月終戦に伴い卒業扱い

昭和22年（1947）京都大学農学部林学科入学、同級の安田 武氏（新潟高等学校卒、後に武庫川女子大学教授）とともに京大山岳部に入る

昭和25年（1950）京都大学卒業、厚生省に採用され国立公園部計画課に配属、厚生技官

昭和34年（1959）富山県庁に出向、立山、黒部など山岳地域の観光開発計画を担当

昭和40年（1965）厚生省に戻り国立公園部管理課に配属

昭和42年（1967）宮内庁に出向（庭園課長）

昭和46年（1971）環境庁の設立とともに同庁自然保護局計画課長

環境庁大臣官房参事官、環境研修所長などを歴任

昭和54年（1979）退官

流されていたところに乗っていた列車が突っ込んだという。宇野さんはその直前に途中下車して泊まることにされて、あやうく難を免れた。

この視察旅行で、主要な国立公園の現地を知っただけでなく、文献で学んでいた米国の国立公園のさまざまな概念をわが国にどのように適用していけばよいのか、それを考える契機を与えられた、と述べておられる。

途中一年間の療養生活を送られたが、その前後に、出羽三山や朝日連峰の10日間の山岳調査、南アルプスの現地調査では千丈岳から光岳まで10日間の縦走などを行った。もちろん調査ばかりでなく、計画課事業係長として施設建設の申請書類の審査などもあり、多忙な日々であった。

富山県時代

昭和34年に、富山県に経済部通商観光課の課長代理として出向される。私が最も興味をもったのは、この時代のことである。

その前年、昭和33年に当選した吉田知事の公約は、「野の夢、山の夢、海の夢を実現する」というものだった。「山の夢」は、立山、黒部、有峰という県東南部のほとんど無人の山岳地帯を一大観光地にしようというもので、基本構想では、黒部川第四ダムの建設を機に、富山から大町への直結ルートを建設し、沿線に観光施設を整備するというものであった。宇野さんは、それを実現するための人材として富山県に招かれたのである。

赴任した年の7月、馬場島の夏山開きに招待され、立山の地獄谷の小屋に前泊して立山川をスキーで下って出席する。これで関係者との親近感が一気に出来上がったとのことだが、山開きの来賓が山からやってきたのでは、関係者はさぞ驚いたことだろう。なお、このときの案内役は、藤平正夫さんのお兄さん、彬文さんであった。

富山から大町のルート上で重要な位置を占める室堂地域の冬の状況は未知であったため、越冬調査隊を派遣することになった。江戸時代からという室堂の建物を補修して使うことにし、県庁と直接連絡できるように無線電話を用意し、連絡や物資輸送のために雪上車を3台用意した。うち1台は、文部省南極観測本部が国内に予備として保留していたものを借用したそうである。クリスマスころには雷鳥沢で雪崩事故

が発生し、無線や雪上車で連絡や救援に協力した。途中で3回、打ち合わせ、調査や慰問のために室堂に登ったが、越冬観測は事故や病気もなく無事終了し、指揮を執った宇野さんは「やっと重い肩の荷を下ろした」。

計画を具体化するための会社、「立山黒部有峰開発株式会社」を昭和35年(1960)に設立して準備を進める。大きな問題はどのような方式で富山大町間を結ぶかであった。富山県関係者の多くはすべて道路で結ぶことを期待していたが、ダムを建設している関西電力はダムの上を一般車両が通ることを否定していた。ダムは昭和38年に完成したが、協議を重ねるうちに、立山東面では雪崩の危険が大きいこともわかり、妥協案として、道路、トンネル、ロープウェイ、ケーブルカーを組み合わせた現在のかたちに落ち着いた。それには、宇野さんらが山岳観光の先進地であるヨーロッパアルプスの視察旅行で得た情報、特に長スパンのロープウェイなどの情報が生かされた。

昭和39年、立山黒部貫光株式会社が設立され、ルート建設を進めることになった。宇野さんは翌昭和40年、6年半の富山県出向から厚生省に戻られた。アルペンルートが全通するのは昭和46年のことである。ほかに富山県出向中に関わられたこととしては、富山県内に初の本格的スキー場の建設、富山県民会館の建設、また富山県登山届出条例の制定などがある。なお、富山時代にも多くの現地調査を行われ、登山・スキーの経験・技術を存分に発揮された。

厚生省から環境庁

厚生省に戻られたころには、国立公園内の開発事業がいつそう盛んになっていたが、いったん事業が計画されると、風致を損なう恐れがあっても、民有地の場合には不許可にするのは難しかった。宇野さんはこれに対し、開発行為を不許可にするかわりにその土地を買い取るという手法を実現された。実際には、土地のある都道府県に買い上げ費用の二分の一を補助するという予算上の措置である。この予算はその後も毎年計上され、各地で効果的に使用された。

2年後に宮内庁に出向、4年を過ごされた。しだいに世の中は変わり、経済成長の反面、環境汚染や自然破壊が目立ってきた。これら環境問題に対応するため、昭和46年、環境庁が新

設された。宇野さんは同庁の発足と同時に、自然保護局計画課長に就任された。入省以来、計画課の重要性を確信した宇野さんにとっては、その筆頭である計画課長は憧れのポストであったので、就任の喜びは大きかった。ところが名前は同じでも、従来は対象が自然公園であったが、新しい立場としては全国土の自然環境の保全が対象と、範囲が広がっていた。そのためまずは基本になる法律を作る必要があり、ご苦労の結果、自然環境保全法が制定された。

環境庁では山岳地域の道路建設への対応、その一つとして尾瀬の道路工事中止、自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）の発案・実施、国立公園自動車利用適正化方針と上高地のマイカー規制など、さまざまな重要な問題の解決にあたられた。

札幌オリンピック（1972年）の滑降競技コース選定では、支笏洞爺国立公園の恵庭岳が有力候補となっていた。宇野さんは立場上当然反対されたが、その一方、施設がずっと維持運営されて日本選手が常に練習できるような場所を選定するなら協力しよう、とも述べられた。日本のアルペンスキー競技のためを思っていたことだったが、残念ながらそれはかなわなかった。ちょうどいま（2月）アルペンスキーの世界選手権が開かれているが、滑降やスーパーGといったスピード系の競技に出場する日本選手はいない。

長年の経験を経て宇野さんは、国立公園の保護計画では、原生的な自然が最もよく維持されている地域を中心におき、その外側を緩衝地帯で囲むのが理想であり、実際の国立公園をその姿に近づけていくのが保護計画のあるべき姿、と考えるに至った、と言われる。その一つの形が、屋久島などが指定された原生自然環境保全地域であろう。

最後のポストは公害研修所長で、目指された研修内容の改革は道半ばであったため、「心残りのまま」昭和54年、29年間の公務員生活を終えられた。

本書の意義

「はじめに」には、以下のように書かれている。「公務員というのは、通常、組織というか、集団で仕事をしているから、芸術家や学者と違って、誰が、どんな仕事をしたかは外からは見え

にくい。一本の法律や規則が定められたり、公共の施設が設置されるまでには、数え切れないほどの多数の人の手加わり、意見が入っている。しかし、その公務員も、担当する分野について、実はひとりひとりが独自の意見を持ち、理想を抱いている。私の場合は、役所に入るときから国立公園に関係する仕事をしたいと考え、ほぼ全期間を、その方面の専門技術者（技官）として過ごすことができたので、常に自分の考える理想の国立公園の実現を目指してきた。法律、規則の制定、それに基づく計画の立案や各種の事務処理、予算の獲得と執行、日常の業務のすべての局面が、その理想の追求であったと言える。」

宇野さんはその理想像と実現の過程を「書き留めておくのも無駄ではないだろう」として本書を出版された。もちろん本書を読むべき方々には読まれていることだろうから、日本の自然公園行政がさらによい方向に向かうことを期待したい。

読後感

宇野さんは昭和25年から、副題のとおり約30年にわたり自然公園行政の道を行ってこられた。その30年間の社会の変化はきわめて大きかったと思うが、それに応じて、現場を確かめ、公園計画を立案・実施し、制度をつくり、一貫して理想の国立公園、自然公園の実現に向かって進まれた道筋は、戦後日本の国立公園の歩みそのものといえるのではなからうか。宇野さんのおかげで、日本の国立公園、自然公園がより理想の姿に近づいたことは間違いないといえよう。

印象に残ったことは、随所にみられる、多くの方々との交流、協力である。組織の内部、外部とも、宇野さんには快く協力を惜しまない方々が実に多く、しかも要所という要所にそのような方が現れる。月並みな言葉しか思い浮かばないが、まさに「人徳」の所以であろう。

私は宇野さんより20年あとに生まれた。山岳部に入って最初の夏（昭和42年）、剣岳合宿の入山では、室堂までバスを利用できた。条例に従って剣岳の登山届けを出したこともある。ずっと後のことだが、学会の会合を富山県民会館で何度か開いた。また尾瀬、上高地、ビーナスラインなども訪れ、楽しんできた。これら

にいずれも宇野さんが関わっておられたことは本書により初めて知って、ほんとうに驚いた。ここでは紹介できなかったが、同様なことはほかにもたくさんあり、まるで、行く先々、宇野さんが先回りして準備を整えてくださったよう

に思えるほどである。

最後に、宇野さんにここからの尊敬と感謝を申しあげて、筆をおくことにする。(本書は残部が少しあるそうです。ご希望の方は宇野さんにお問い合わせください。)

第31回雲南懇話会 (2014年12月20日開催)、その講演概要

前田栄三

第31回雲南懇話会は、2014年12月、東京市ヶ谷のJICA研究所国際会議場で開催され、120名の参加を得て、盛況裡に終了しました。

以下、概要を紹介致します。

(写真は会場風景と放送大学大学院 河合明宣教授の総括の様子。撮影は共に長岡正利氏)

1. 「雲南懇話会、10年の歩み」－懇話会の今、これから－

雲南懇話会代表幹事 前田 栄三

雲南懇話会は2014年12月に満10周年を迎えた。10年間148件に及ぶ講演、Field work (10回)、タイ文化圏 Study tour (3回) について、概観した。講師の員数は延べ149名、重複を除くと113名。内、各界の学識経験者及び山岳関係者等は78名、京都大学山岳部関係者35名。最多の講演回数は、小林尚礼氏 (カワカバ会代表、写真家、AACK) の13回である。

雲南懇話会の諸活動を記録し公開していること、雲南懇話会がJICA国際協力人材センターの運営するPARTNER (国際協力キャリア総合情報サイト) に国際協力団体として登録されたことを紹介した。雲南懇話会ML (350人が登録) 及びPARTNERにより懇話会活動を広報していること等、紹介した。



今後の有り様について、これまでの座学とフィールドワークを両輪とした路線を踏襲しつつ、中央アジアを含む対象地域の「拡大」とタイ文化圏を中心に「深耕」を図ること、及び地域に特化した活動を志向したい…として話を結んだ。

2. 「ネパール、ポカラの国際山岳博物館と私のヒマラヤ登山」－JICA シニアボランティア活動とその後のネパール三昧－

日本山岳会海外委員、東京都山岳連盟海外委員
竹花 晃

ネパール山岳協会によるポカラの国際山岳博物館は2004年2月に正式オープンした。この博物館の設立及びその後の運営においては日本の山岳諸団体や関係者によって資金、物的援助等多大な貢献があった。またJICAより海外シニアボランティアが、自身を含め過去4人、9年に亘り人的・物的援助を行っている。この山岳博物館の概況及び仕事内容を説明した。

自身のヒマラヤ登山やトレッキングの内容、ネパールヒマラヤの新規に解禁された峰々、登山料金改訂の内容、本年10月に発生した遭難事故についても紹介された。話は多岐に亘ったが、分かり易い資料と明快な語り口で理解が進んだ。

3. 「キルギス自転車旅行、GPSとNASAの3次元地形データ (SRTM) の活用」－キルギス見聞録、SRTMの活用事例 (梅里雪山巡礼路等の等高線図・高低図作成) －

サイクリスト、シルクロード雑学大学 (歴史探検隊)
前田種雄

定年後に自転車でキルギスを6回旅行。キルギス帽をかぶり、Kyrgyzの美しい雪山・草原・湖、そして穏やかな暮らしの一端を紹介した。



「是非、Kyrgyz ファンになって頂きたい」と熱弁をふるわれた。

良い地図がないこの地域を安全に旅するにはGPSの活用が第一…として、デジタル地図は無料のOpen Street Mapを、地形データはNASAの3次元地形データ(SRTM)を用い、地図ソフトKashmirで、等高線図、高低図を作成した。世界の殆どの地域が対象になり自宅のPCで作成できる…として、玄奘三蔵法師が越えたKyrgyzのBedel峠への道、梅里雪山の巡礼路等の作成事例を紹介した。

茶話会の席で多くの方々から声をかけられ(興味関心を示され)、大勢のキルギスファンを得たといって破顔一笑された。

4. 「ヒマラヤ・チベット高所住民の健康」 —低酸素適応と生活変化の相互作用—

京都大学東南アジア研究所連携准教授、
総合地球環境学研究所客員准教授、AACK
奥宮清人

チベット人は、ヘモグロビンの過剰生産を抑制し血液がドロドロになることを防ぐ方法で低酸素適応した。EPAS1遺伝子に特異な変異があり、それは、ネアンデルタール人と同時代に生きていたデニソワ人から受け継いだという証拠が最近発見された。我々の調査より、チベット人は高血圧や糖尿病に脆弱であることが判明し、若い時には有利であった低酸素適応方法が、高齢になると生活習慣病には不利となるトレードオフが背景にあるらしい…として、概要を説明された。一般には馴染みの少ない分野なので、限られた時間で判り易く説明するのは大変だったことと思う。

5. 「タイ・ビルマ漆器と中国虫糞茶」—ビルマウルシの生産とタイ北部のビルマウルシ林を調べる。中国南部の虫糞茶とは何か?—

京都大学名誉教授(森林科学専攻) 渡辺 弘之

タイ・ビルマ漆器は日本のウルシとは別種のビルマウルシからの漆液を使う。漆器は多様なかたちだが、これはタケを薄く裂きこれを編んだものの上に粘土を塗り込み、漆を塗ったもので籃胎漆器という。タイ北部2箇所調査したビルマウルシ林の構造とそこでの漆生産の方法を概説した。ビルマウルシはメルクシマツ林やフタバガキ樹木と混交していた。漆掻きの傷はカレン族とタイヤイ族では違った。

日本に「うるしの日」があり、11月13日であることが語られた。

中国に虫糞茶というのがある。どんな虫の糞か、チャの葉を食べさせるのだろうかに興味を持って調べたら、虫は化香夜蛾と呼ばれるソトウスグロアツバ、そして与える樹木はチャでなく化香樹と呼ばれるノグルミであった。さてその味は? ご自身が試飲したところ「とても乙な味、とも言えなかった」「カビ臭い」という。にこやかに話されたその余韻が、殊のほか心地よかった。

【後記】渡辺弘之先生とは、2014年5月末に尾瀬(戸倉)のロッジ長蔵で平野紀子さんに紹介され、和やかに歓談したことがありました。しかし元を辿れば、2014年2月、AACK新井浩会員がバンコクの空港で渡辺先生と初めて言葉を交わされ、その時の様子を笹ヶ峰会MLに配信されたのが事の発端となり、今回のご縁をいただくことに結び付きました。改めて新井会員に感謝を申し上げます。

第32回雲南懇話会の予告

1. 日時; 2015年4月18日(土) 13時00分~17時30分。茶話会; 17時30分~18時40分。
2. 場所; JICA研究所国際会議場。(東京市ヶ谷)
3. 内容; 講師、講演の順序、演題など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。

(1) 「インド横断、自転車紀行」

— Asian Highway1・パキスタン国境からカルカッタまで、2,069 km —

サイクリスト、通訳案内士、会社員
芳井 健一

(2) 「2014ムスタンの未踏峰“Mansail

6,242m” 遠征記」－女子大生 4 人と過
した 40 日間、ムスタンの旅－
アルパインクライマー、野外研修ファシ
リテーター、国立登山研修所講師

谷口 けい

- (3)「ブータンの小さな診療所」－ブータン
王国東部タシガン県カリンでの試み－
京都大学白眉センター特定助教、

医師、医学博士、AACK 坂本 龍太
(4)「鄭和と雲南碑文のナゾ」－「海洋強国」
中国のシンボルの実像に迫る－

立教大学文学部教授 上田 信

- (5)「改革開放後の中国と新華僑」－変容す
る世界のチャイナタウン－

筑波大学大学院教授（生命環境系 地球
環境科学専攻） 山下 清海

日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・搜索保険の案内

< 2015（平成 27）年度 >

AACK 事務局

ご注意：この案内は AACK 会員専用ですので、AACK 会員以外の方は、山岳共済会に直接お申し込
みください。

日本山岳協会の山岳共済会および山岳遭難・
搜索保険の 2015 年度の加入方法などの案内で
す。加入を希望される方は下記の要領で手続き
を行ってください。

現在、制度の運用に必要な業務は横山宏太郎
様、永田 龍様にご協力をいただいています。
連絡先などを間違えないよう、ご注意ください。

1. 山岳遭難・搜索保険の種類

(1) 登山の内容により、「登山コース」と「ハ
イキングコース」があります。登山コースは、
ピッケル・アイゼン・ザイル等を使う登山やロッ
ククライミング、冬山登山などを対象とします。
保険金額、入院補償の有無で 10 タイプがあり
ます。ハイキングコースは初心者でも可能な一
般登山道での普通の登山（夏山登山で雪渓を越
えるために軽アイゼンを使用した場合も対応す
る）が対象です。3 タイプあり、保険金額、通
院補償の有無が異なります。ハイキングコース
の場合は登山コースと異なり、疾病が原因とな
る搜索費用は補償の対象となりません。

個人賠償責任補償のないタイプもあります
が、内容は山岳共済事務センターに照会となっ
ています。山岳共済会としては、個人賠償付き
を薦めています。

以上の中からいずれか一つだけ、希望のコー
ス・タイプを選んで加入します。それぞれの保
険料に、年会費 1000 円を加えた合計支払金額
を払い込みます。

(2) 登山コース、ハイキングコースのいずれも

山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の
対象になります。

(3) 通年の場合、期間は毎年 4 月 1 日午前 0
時から翌年 4 月 1 日午後 4 時までです。継続
の方は、前年度の契約終了の 4 月 1 日午後 4
時から、新年度の契約が有効となります。

中途加入も受け付けられます。保険料は開始
月ごとに設定されています。

(4) 海外での登山やトレッキングを対象にする
海外山岳コースは、基本契約タイプの場合、保
険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難
搜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証
されることを確認しています。

死亡・後遺障害 100 万円

救援者費用 500 万円

個人賠償責任 1 億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見
積もられることになっていますので、海外登山
又はトレッキングに行かれる方は、事前に横山
様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積も
りを取得して下さい。国内と同様に、山岳共済
会の会員であることが加入の条件になります。
国内の山岳遭難・搜索保険に加入している場合
は、一部は海外でも保険対象となります。

ほかに、治療・救援費用が補償されるタイプ
もあります。詳しくはお問い合わせください。

2. 加入の手続き

新たに加入を希望される方は、下記担当者ま
でお問い合わせください。前年度加入者には案

内済みです。

3. その他

(1) 詳しい内容等は、山岳共済会の山岳遭難・捜索保険の案内パンフレットを、AACKのウェブサイトにも置きましたので、内容を確認してください。

(2) 日本山岳協会のホームページにも説明があります。ただし、情報の年度にご注意ください。

山岳共済会 <http://sangakukyousai.com/>

(3) 新規加入など山岳共済については、担当の横山様にお問い合わせください。原則として電子メールでお願いします。アドレスは peng-y@amy.hi-ho.ne.jp です。

会員動向

事務局から

「総会の日程が決まりました」

2015年度一般社団法人京都大学学士山岳会総

会の開催は、5月24日(日)に決定いたしましたので、ご連絡申し上げます。詳細につきましては、後日改めてご案内致します。

編集後記

この冬は12月にいきなり本格的な降雪があり、雪に慣れているはずのここ高田(上越市)あたりでもいささか慌てました。1月にはいつてからは平野部はそれほど積雪が増えず、生活する上では助かっています。しかし山沿い中心の降雪も影響したか、バックカントリーの事故が何件もあったのは残念なことでした。

阪本さんの未踏峰探査記録については、文末の注記の通り、AACKホームページにカラーの写真がたくさん掲載されていますので、ぜひご覧下さい。

宇野さんの自伝を紹介する拙文は、書き始めたものの、平井さんの「人物抄」のようにはいかず、不十分な内容で失礼しました。

71号の編集後記で、「70号に原稿をちょうだいした皆様・・・」と書きましたが、もちろん71号の間違いです、失礼しました。今回は

間違えないように、「72号に原稿をちょうだいした皆様、ありがとうございました」。

横山宏太郎

発行日 2015年2月28日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松林公藏
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所